

## 本質主義は二度死ぬ

氏名：田中 泉吏

所属：日本学術振興会（慶應義塾大学）

現在、生物学の哲学の一部において本質主義の是非が論議の的になっている。生物種に本質はあるのだろうか。本質主義は生物学の理論と矛盾しないだろうか。このような議論が今更話題に上ること自体が不可解であると思われるかもしれない。というのも、生物学の哲学において「本質主義の死」はもはや常識となっているからである。この「常識」によれば、ダーウィン以降の進化生物学の知見を受け容れれば、生物に関して本質主義を擁護することはできない。これは生物学の哲学に限った話ではなく、本質主義を標榜する形而上学者も、しばしばそのような「常識」を認めている。

だが近年、一部の有力な哲学者たちが本質主義を新しいかたちで「蘇生」しようと、さまざまな主張を提出している。本発表ではこれらの「新しい本質主義者」のすべての主張に詳しく触れることはできないので、そのうちの一つである「恒常的性質クラスター (homeostatic property clusters: HPC) 説」に焦点を合わせて、新しい本質主義を批判的な立場から検討する。

HPC 説によれば、自然種語は恒常的に共起する性質クラスターによって定義されるのであり、そうした性質クラスターの恒常性を引き起こすメカニズムが存在する。さらにこの説は、生物界に遍在する多様な変異や連続性や曖昧な境界を認めつつも、説明や予測を可能にするようなものとして自然種を定義している（これは HPC 種と呼ばれる）。生物種や遺伝子などは、実際そのような HPC 種であると主張される。この説が本質主義の一種とされるのは、従来の本質主義において自然種が持つとされた説明力を、HPC 種も有しているとされるからである。

はたして生物にみられる多様性や連続性は、生物種や有機体などの生物学の主要カテゴリーを HPC 種として定義することを許すだろうか。たしかに、一部の生物だけに限って見れば、この説は上手く当てはまるように思われるかもしれない。しかし、生物界を広く見渡すと、そのような定義が難しいと考えられるケースが数多くみつかるだろう。とりわけ、原核生物がそのような反例を提供する。原核生物と真核生物では遺伝や進化のメカニズムが大きく異なっており、両者に共通する一般的なカテゴリーを考えることはきわめて難しい。このような指摘は的を射たものであるように思われる。それゆえ本発表では原核生物に注目することによって、新しい本質主義も保持しがたいと論じる。さらに、以上の議論が多元論や実在論の是非に関する論争にどのような含意をもたらすのかということについても考察を加えたい。